

heisei16

六花

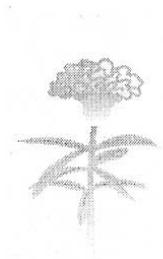
Rikukwa haikukai

11

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho
凧 ohdako no orikite kusa no iro to naru
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryoyaku ni

designed by Asuka

訪
戴



山田六甲

紙切れにもどり印南の秋の蝶
秋涼し甲乙丙の乙くらゐ
灯火親し万年筆を蒐めては
十三夜指鉄砲でおのれ撃て
手習ひのウクレレを抱く十三夜
三線さんしんの泣かせどころや月の萩

芒の穂すすきに触れて白さ増す
帰り花めがね通して天仰ぐ
風水で謂はば佳き色秋の鯉
日本は三災七難すさまじや
この部屋に迷ひ込みたる小鳥かと

伊藤孝志君へ地区部長交替

一枝をのこしてゆづり松手入
はればれと天下の秋を渡しけり

柳生千枝子さん

階段をのぼるたび風爽やかに

口切

中 村 房 江

口 切 や す く む ほ ど 晴 れ 東 山
口 紅 を 妹 に 買 ふ 落 葉 季びと
ざ う と 風 く だ り て 柞 紅 葉 か な
紅 葉 し て 有 馬 一 山 ま と ま り ぬ
男 傘 く さ め を 一 つ 放 ち た る

マスクして

松 山 律 子

目 切 帽 銀 行 強 盗 必 需 品
マ ス ク し て 心 変 わ り を 知 ら れ た か
雑 炊 と 馬 鹿 に し な い で 兄 い も と
鳥 達 も 焼 き 鳥 屋 に は 近 寄 ら な い
訳 も な く 涙 出 て く る 神 有 月

山清水

二 瓶 洋 子

山 寺 の 池 を 自 在 に 糸 蜻 蛉
き ら め き て 草 ぬ ら し ゆ く 山 清 水
と け る ま で 舌 の 上 な り 麦 落 雁
捕 ふ る に あ ら ず 鳴 き 止 む 油 蟬
天 瓜 粉 打 ち て 喜 寿 な る 夫 可 かな

短夜

鳴 海 清 美

ひ と 卷 の 糸 買 ひ に 出 る 街 灼 け て
短 夜 や 退 屈 な 本 読 ん で を り
蜘 蛛 の 囿 に 絡 め ら れ た る 眼 鏡 可 かな
そ の 先 に 海 の 音 あ り 夏 木 立
は ま ぼ う の 黄 の 透 明 へ 遠 い 橋

短夜や退屈な本読んでをり

鳴海 清美

ひと巻の糸買ひに出る街灼けて

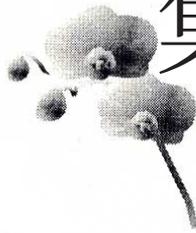
蜘蛛の囀に絡められたる眼鏡かな

その先に海の音あり夏木立

はまぼうの黄の透明へ遠い橋

退屈な本を、短夜の眠れぬ暑苦しさから逃れるため、眠り薬の代りに読んでいる。と解釈すればそれは理屈の勝った句で陳腐・月並みになるが、退屈でも読まなければいけないところに作者の勉学の姿勢があり、秋の夜長とはちがつて、読み疲れて寝床に入ったかと思えば、あつという間に夜が明けてしまった。と解釈すべきである。

楳木集



香水

角田 信子

色のなき大人の童話星涼し
夜の秋ガラスの靴のはき心地
香水に叶う夜景と男かな
ナイトツアーにあらざ墓参のハイヒール
鎖骨美しネックレス美しと灯蛾もつれ

蛸の死

貝森 光大

蛸壺に波音遺して蛸死せり
蛸死して骨一片も遺さざる
蛸の死の謎が謎よぶ外ヶ浜
墨で書く蛸の遺言外ヶ浜
墨吐いて蛸の描きし未来絵図

ゆきのした

梶浦玲良子

ゆきのした釣瓶の綱の湿りごゑ
河鹿澄む橋さむざむと点したる
すこしづつ歩きはじめし鮎の岩
さみだるる棚田一湾なしにけり
ゆふぐれのひたひたと来る囀鮎

蛸死して骨一片も遺さざる

貝森 光大

蛸（章魚）は軟体動物なんだから、そういえば「生きた証」が何ものこらないんだね。西洋ではイタリア・ギリシャ・スペインを除いた国では悪魔の魚として嫌われる存在だけど、悪魔だった証さえこのらないのは可哀想だね。虎は皮を残すし、最悪皮がこのらないのも骨ぐらいはのこるんだけど……。でも俳人はその点大へん仕合せだね、句の一片ぐらいは遺せるんだから……。というわけではあるけれど作者の心底には何だか自らが蛸のようだど気持を投影しているのかも知れない。

蛸に骨などないのだから当たり前といえど当たり前のことを正面切つて言われると、妙に読み手の心に響くものがあるのも事実。そのところの呼吸は光大さん独自の持ち味なのだから、誰も彼もが真似すればいいというものではないから要注意。（以下略）

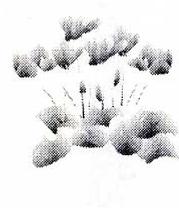
菜根譚



山田六甲

会員作品

六花集



林 裕美子

重文の家や紅葉の頃知らず
世が世なら居れぬ座敷の昼寝かな
煎餅の夕飯がはりアロハシャツ
桃の実やミーハーのまま年増して
もう少しも少し遠くに夏の虹

近藤 貞子

山 の 狸

いくとせも一誌に添はむ秋の草
七夕雨一片の詩の膨らめり
鳳仙花はじけて跳んで出家せり
生身魂猫の半眼寄りがたき
八月の油断してゐし朝鏡

水打つて闇にひそめる風呼びぬ
蝉時雨蝉のやうには恋できぬ
原爆忌五十九年に機長死す
蝸やかなはぬ恋をうたふのか
蝉時雨今日また一つ命尽く

永田

勇

中谷喜美子

スローモーション動かば玉の汗になる
職人のねぢり鉢巻き酷暑かな
今朝も亦尻に火のつく蝉時雨
乳飲み子を洗ふが如く墓洗ふ
バス停の墓参歸りの母子かな

出口 誠

射場 智也

終戦日これからのこと論じ合ふ
ちちろ虫声なき声でありがたう
もみぢ葉の社のみくじすべて凶
わいせつな落書されし文化の日
銀杏に塩の破片の光りをり

三つまで穴を数へて蝉時雨
テーブルの下にもてなす蚊遣り香
滴りの旅の果てなるわたつうみ
桐一葉単線往復三十分
学内は禁煙となり秋に入る
今にして思ひ出すひと晩夏光
世間にも家族にも遅れ墓参り
秋立つて夜風の友となりにけり
明らかに初秋の風水面より
眩しさは早稲の実りの印南かな